

氏 名 : 張 曉 春  
学位の種類 : 博士 (看護学)  
学位記番号 : 甲第1号  
学位授与年月日 : 平成20年3月25日  
学位授与の要件 : 学位規則第4条第1項該当  
論文題目 : 子どもの韌性尺度の開発に関する研究  
— 中国における人的災害を経験した子どもに焦点を当てて —  
Development of the Children's Resilience Scale (CRS)  
Focusing on the Children Who Experienced Man-made  
Disaster in China  
論文審査委員 : 主 査 片 田 範 子 (兵庫県立大学)  
副 査 南 裕 子 (兵庫県立大学)  
副 査 森 口 育 子 (兵庫県立大学)  
副 査 高 木 廣 文 (東邦大学)

## 論文内容の要旨

### [キーワード]

子ども、韌性 (resilience)、人的災害、尺度、小児看護、中国

### [研究の目的]

近年、中国で多発する人的災害は、おとなのみならず子どもの身体、精神、生活の側面に深刻な影響をもたらしており、適切な支援の必要性がある。近年西洋諸国においては災害や虐待など外傷を受けた子ども達の韌性に注目し、支援活動のあり方の検討が始まっている。しかし、中国において人的災害を経験した子どもを対象とした看護についての支援や子どもの韌性に焦点を当てた研究はほとんど行われていない。

本研究の目的は将棋倒し事故を経験した中国の子どもに焦点を当てて、人的災害に対する子どもの韌性をアセスメントするための「子どもの韌性尺度」中国語版を開発し、尺度の妥当性、信頼性を検証することとした。また、「子どもの韌性尺度」を用いた調査の結果に基づき、子どもの対処能力、適応能力を促進するために、人的災害を経験した子どもに、より適切な看護支援策の可能性を検討した。

## [研究方法]

本研究は2回に分けて調査を行い、子どもの人生尺度の精錬に努めた。

### 1. 予備調査まで：「子どもの韌性尺度」の作成、内容妥当性の検討

韌性の概念分析を行い、子どもの韌性の概念枠組み、下位概念を明らかにした。これには小児看護の視点から、人的災害を経験した子どもにとって重要と思われる韌性の下位概念を「精神的強さ」「個人能力」「外的サポート」とし、それぞれ構成する52項目からなる「子どもの韌性尺度」中国語版を作成した。なお、この尺度については中国の小学校教師1名、本研究の研究協力者と同年齢層の中国人の子ども8人（男子3名、女子5名、年齢範囲11から12歳）に尺度及び各質問項目の表現についてインタビューし、尺度の表面妥当性を検討した。

さらに、中国北西部某地域の小学生165名（平均年齢11.13歳、年齢範囲9～13歳）を対象に、自記式質問紙調査による第一次調査（予備調査）を実施し、統計ソフトSPSS12.0Jを使用し、項目分析を行った。

調査期間は2007年1月上旬から2月中旬であった。

### 2. 本調査：「子どもの韌性尺度」（49項目版）の信頼性、妥当性の検討

洗練した尺度を用い、自記式質問紙調査法で将棋倒し事故を経験した中国南西部某地域の小学生とその養育者866名を対象群、中国北西部某地域の小学生とその養育者306名を比較群に本調査（第二次調査）を実施した。尺度の信頼性・妥当性を検証するために魏（1997）によって開発された「児童自尊尺度」、Zhang & Schwarzer（1995）による「自己効力感尺度」中国語版（GWES）、Perris（1980）により開発され岳（1999）により中国語版が作られた「親の養育方式質問紙」を用いた。また、養育者からは「Rutter児童行為尺度」（親用）中国語版を用いた。統計ソフトSPSS 12.0Jを使用し、主因子法・Promax回転で因子分析を行い、尺度を新たに構成した。また、Cronbach's  $\alpha$ 係数を求め、尺度の内的整合性を検証し、相関分析、分散分析で尺度の基準関連妥当性、構成概念妥当性を検討した。

調査期間は2007年3月から4月上旬であった。

## [倫理的配慮]

兵庫県立大学看護学部研究倫理委員会に承諾を得て、調査を実施した際に、研究協力者の自由意志と権利を尊重し、研究協力者のプライバシーの保護を十分に配慮しながら、研究データを厳重に取り扱い、調査を実施した。

## [研究結果]

### 1. 第一次調査まで：「子どもの韌性尺度」の作成、内容妥当性の検討

「子どもの韌性尺度」は3下位概念「精神的強さ」、「個人能力」及び「外的サポート要因」、52

項目から構成され、4段階評定法で評価し、得点が高ければ、韌性が高いと評価した。I-T相関及びCronbach's  $\alpha$ 係数で検討した結果、尺度全体の $\alpha$ 係数は.865であり、下位概念「精神的強さ」は.811、「個人能力」は.695、「外的サポート状況」は.411であった。項目について精査を加え、この段階では弁別力の弱い3項目を削除し「子どもの韌性尺度」(49項目版) Cronbach's  $\alpha$ .871に洗練した。

## 2. 本調査：「子どもの韌性尺度」(49項目版)の信頼性、妥当性の検討

対象群から得られた自記式質問紙による調査結果は有効回答率78.29%であり、678名から(平均年齢11.64歳、年齢範囲9～13歳)得られた。また、比較群の有効回収率は89.21%であり、273名(平均年齢11.46歳、年齢範囲9～13歳)の回答が得られた。

第一次検討では、因子分析により3下位概念構造、固有値による14因子構造について検討した。しかし、設定した下位概念が各因子に分散し、3下位概念構造、14因子構造で尺度の構成概念妥当性が十分に支持されず、3下位概念構造、14因子構造が将棋倒し事故を経験した子どもの韌性の状況を十分に説明しきれていない可能性があるため、さらに検討を加えた。

第二次検討では、I-T相関及びCronbach's  $\alpha$ 係数で弁別力の弱い4項目( $r < .30$ ;  $\alpha > .882$ )を削除し、「子どもの韌性尺度」を49項目から45項目に洗練した。3下位概念構造、固有値による12因子構造について、主因子法・Promax回転により再度検討した。しかし、設定した下位概念が各因子に分散され、3下位概念構造、12因子構造により尺度の構成概念妥当性は十分に支持されなかった。因子スクリープロットで因子数を新たに指定し、6因子、因子負荷量.35以上の28項目が抽出され、6因子までの累積寄与率は46.50%であった。尺度の内的整合性を維持するために、第6因子( $\alpha = .501$ )を削除し、「子どもの韌性尺度」は5因子26項目となった。最初に設定した子どもの韌性概念枠組みの3下位概念に関して、下位概念「精神的強さ」が新たに「信念と態度」と「自信と自尊」の2因子に集約され、「個人能力」が新たに「社会的能力」、「学業の遂行」、「基本的日常生活の維持」の3因子に集約された。尺度全体の $\alpha$ 係数は.838、各因子の $\alpha$ 係数は.75～.57、尺度の内的整合性が支持された。

## 3. 「子どもの韌性尺度」の基準関連妥当性及び構成概念妥当性

### (1) 基準関連妥当性

子どもの韌性に寄与する要素を測定する尺度(自己効力感尺度、児童自尊尺度)を使用し、「子どもの韌性尺度」との関連から併存的妥当性を検討した。「子どもの韌性尺度」は自己効力感尺度、児童自尊尺度と正の相関を示した( $r = .41$ ,  $r = .54$ ,  $p < .01$ )。このことにより、「子どもの韌性尺度」の併存妥当性が支持された。なお、比較群より対象群の自己効力感得点、自尊得点が低かった。

## (2) 構成概念妥当性

仮説検証法を用い、8つの研究仮説を検討した。「韌性を有する子どもと韌性を有しない子どもの韌性得点の差」、「上位群、下位群の韌性得点の差」、「対象群、比較群の韌性得点の差」、「問題行為の有る子ども、問題行為の無い子どもの韌性得点の差」、「子どもの韌性尺度各因子間の相関」、「『子どもの韌性尺度』『自己効力感尺度』、『児童自尊尺度』との相関」、「親の養育方式と子どもの韌性との関連」及び研究協力者の一般属性に関する研究仮説が全体的に支持され、「子どもの韌性尺度」の構成概念妥当性が検証された。

## [考 察]

「子どもの韌性尺度」を最終的に「信念と態度」、「社会的能力」、「学業の遂行」、「自信と自尊」、「基本的日常生活の維持」の5因子、26項目とした。また、「外的サポート状況」に関連する項目を削除するに到った経緯として、中国における人的災害後のソーシャルサポートが不足している現状や設定した質問項目が将棋倒し事故を経験した子どもの外的サポート状況を十分に反映しきれていない可能性、ならびに質問の設定と質問に対する子どもの理解による食い違いといった原因があることなどを考え、今回は下位概念「外的サポート状況」を尺度から削除した。

内的整合性、併存的妥当性、構成概念妥当性を検討したことによって尺度の信頼性、妥当性が支持されたため、「子どもの韌性尺度」は中国の子どもの個人の精神状態と個人能力を表すものであると考えた。なお、測定用具として、「子どもの韌性尺度」を使用することによって、信念と態度、社会的能力、学業の遂行、自信と自尊、基本的日常生活の維持の側面から、小児看護の視点で実際に人的災害を経験した子どもたちの韌性の全体的な傾向を効率的に把握できると考えられる。

## 論文審査の結果の要旨

張氏の研究は中国における人的災害を経験した子どもに焦点をあてて「子どもの韌性尺度」を開発することであった。文献検索、概念分析、中国の文化についての分析を加えた上で理論枠組みを構築し、52項目の尺度を作成した。第一次調査と第二次調査の段階的に項目の洗練を加え表面妥当性、信頼性、弁別性を検証し本韌性尺度に精練した。

張氏は専門領域を小児看護学としているが、災害の多発する近年の状況から、中国においての取り組みの必要性に着眼し、災害時に支援が必要とされている小児への影響をテーマとすることとした。子どもの持つ韌性 (Resilience) についての着目は、難解な概念であるが、災害からの回復を促すうえで、その子どもの持つ能力を測定できることは社会的にも評価できることであると考えられる。

研究の背景と文献検索では、この領域における文献を十分に検討され、尺度開発の基礎になる概念分析から尺度の枠組みを作りだしている。このプロセスにおいて、中国における価値を考慮にいれ、尺度項目を作成している。

尺度精練の過程を踏み、結果が明示されていると判断した。最初に52項目であった項目を削減していくことについて、統計学的な意味のみではなく、理論的基盤に対するの考慮をしていくことの重要性が指摘されている。当初の概念枠組みの下位概念である「外的サポート」が項目として削減されていることについては、外的サポート項目として位置づけられていた項目は主として子どもの韌性そのものではなく、影響を与える外的資源であり、家族や地域レベルから得られる保護因子に集約されていることなどから、今回構築した「子どもの韌性尺度」は個人的要因を見るものと位置づけている。本尺度の災害発生時などへの活用については、個別介入ではなく全体的傾向を把握し、介入の方向性を検討することになり、さらなる実用性については今後の課題となる。人的災害のみではなく自然災害後の子どもたちの状態についての把握に今後活用していけるよう、今後の発展を期待している。

以上の結果、本論文は学位論文として十分な内容を有するものと審査委員会ならびに研究科委員会で判定された。